平成 29 年度みんぱく若手研究者奨励セミナー
「グローバル現象を人類学はどのように捉えるか」発表要旨

ボルネオ先住民社会のキリスト教化による動植物の利用形態と認識体系の変容を探る

―サバ州市街地近郊に住むドゥスンの人たちを事例に―

総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻　博士後期課程　西山文愛

本発表は，ボルネオ・サバ州の市街地近郊に住むドゥスンの人たちを対象に，サバ州の近代化とキリスト教改宗に伴った，動植物の利用形態と認識体系の変容について考察をおこなう。

ボルネオ先住民に関わる既往研究では，第二次世界大戦後の急速な森林開発と都市化にともない，ボルネオ先住民の生活環境と生活の質の変化が，これまでに数多く指摘されている。しかしながら，市街地近郊に住むドゥスンの人びとを対象にした，動物利用形態と認識体系の現代的な動態および実態を捉えようとする研究は，ほとんど見られない。

そこで，本発表では，市街地近郊に住むドゥスンの人びとの（１）宗教，（２）生業の，二つの変化に着目し，市街地近郊に住む人々の狩猟採集活動から，彼らの動植物とのかかわりの変容を明らかにする。

（１）宗教の変化：ボルネオでは，先住民のキリスト教化，イスラーム化が進んでいる。ボルネオにおけるキリスト教布教記録は 16 世紀まで遡り，特に，イギリス植民地独立後の 1970 年以降にキリスト教徒が増加したと言われている。また，2010 年のセンサスによれば，ドゥスンの人々が属するカダザン・ドゥスングループの 74.8％がキリスト教を信仰している。発表者の調査村においても，大部分の人がカトリック教徒である。

以上のような宗教の変化が見られる中で，市街地近郊のドゥスンの人々は，動植物とのかかわりの変化について「宗教がない時代」/「宗教がある現在」あるいは，「ボボの時代」/「キリスト教を信仰する現在」という枠組みの中で説明をおこなう。「宗教がない時代」には，動植物などの自然に宿る諸精霊モゴンディ（*mogondi*）の存在を信じ，ボボヒザンと呼ばれるシャーマンを中心に，モゴンディに対する儀礼がおこなわれてきた。さらに、ドゥスンの人びとの間では，森の中には、動植物や悪霊などのモゴンディが数多く存在していると考えられてきた。彼らにとって「森」は，生活の上で重要な場であり，信仰や畏怖の場として捉えられてきたのである。

しかし，調査村の人びとがモゴンディの説明をする際に，自分たちはキリスト教徒であり，モゴンディは昔の信仰であることを強調する。一方，そのような語りの中で，彼らが狩猟採集活動の際に，モゴンディに対して畏怖の態度を示し，それに対する特別な行動を実践していることが観察された。

そこで，本発表ではまず，キリスト教化という変化の中で，モゴンディに対して実践されている特別な行動を概観する。

（２）生業の変化：一般に，ドゥスンの人びとは，焼畑や水稲耕作をおこなう定住型の農耕民で，狩猟採集活動をする民族として知られている。しかし，市街地近郊に住むドゥスンの人びとは，市街地での就業や土木作業などの賃金労働に依存し，一部の世帯では，天然ゴムの樹液採集やオイルパームなどの換金作物で収入を得ている。しかし，こうした市街地との結びつきが強い生活を送りながらも，彼らは周辺の熱帯林において狩猟採集活動を続けている。以上２点から，ドゥスンの人たちの信仰と生業の変化が指摘できるが，こうしたなかで，彼らと「森」のかかわりは，いかに変化したのであろうか。そこで，本発表では，市街地近郊に住むドゥスンの人びとの森での狩猟採集活動に着目し，彼らの動植物の利用形態や認識体系の，どの部分が変化し，どの部分が変化していないのかを考察する。